

1.はじめに:概要

図1 SDGs17の目標（出所：国連広報センター）



「持続可能な開発目標」（SDGs）とは、2001年に策定された「ミレニアム開発目標」（MDGs）の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標である。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、「地球上の誰一人として取り残さない」ことが謳われている（図1）。他方で『朝日新聞』2019年8月の調査では「SDGsという言葉聞いたことがあるか」という質問に「ある」と答えた人は27%に過ぎず、一般に普及しているとは言い難い現状がある。

このようなSDGsに関する認知不足は、「世界文化遺産」富士山を擁する富士宮市役所としても例外ではないと考えられた。当初「富士宮市では、国連で採択を受けた持続可能な開発目標（SDGs）を、市の施策に落とし込み、積極的に推進している。しかし、市民や市内企業にまで浸透しているとは言えず、更なる普及啓発等の活動が必要である。」という認識のもと、「市民等へ広く啓発」することを課題としていた。富士宮市広報誌2019年6月号では市役所におけるSDGs17項目に対する取り組みが紹介され、市民の意識喚起がはかられた。

他方、富士宮市内における民間の環境保全・地域活性化、持続可能な農業などSDGsに関連する取り組みは以前から活発であった。環境問題が社会的に議論され始めた1980年代から自然環境教育に取り組んでいる団体が拠点を構え、自然環境を生かしたエコツーリズムもインバウンド観光客を取り込んでいる。また退役した政府専用機の機材リサイクルを受託したのは市内に拠点を構える企業であった（時事通信、2019年5月17日）。また市内には持続可能性と安全性を追求する有機農法の農家が集積、農業の活性化の切り札として注目される農業・食品加工・飲食業の垂直統合ビジネスモデル「第6次産業」の事例や地域資源を活かした食のあり方を提案する民間事業者は数知れない。また東京在住だった女優が富士宮に生活拠点を移し、「半農生活」を営む様子も時折メディアでも取り上げられている。視点を民間に移せばまさしくSDGsの先進事例の宝庫ではないか？

そこで、国際経済学・経営学や社会人類学（国際開発プログラム）のゼミ学生が中心となり、SDGsに関する市内での優れた取り組みを発掘・調査し、富士宮市での民間事業者・市民団体による動きの全体像を把握することを目指した。

2. 目的

今回のプロジェクトでは、学生と市役所が協力し、SDGsにつき新たな視点やアイデアを得ることを目的とした。

取材先は、NPO法人母力向上委員会（育児支援）、一般社団法人エコロジック（エコツーリズム）、地域コミュニティ「ビオトップ大岩」（環境保護）、株式会社アサギリ（リサイクル事業）、富士宮清掃有限会社（清掃事業）、株式会社富士パック（パッケージング）、エンビプロ・ホールディングス（リサイクル事業・コンサルティング）、ゆのさや農園（富士山麓有機農業推進協議会）、風岡たけのこ園、ホールアース自然学校（自然体験教育）、富士宮やきそば学会、株式会社マクルウ（マグネシウム製品開発）の12か所である。

3.主張・結論：気が付けば実現しているSDGs

結論を先取りするというならば市内の民間活動は「気が付けば実現しているSDGs」である。今回の調査で訪問した事業者・団体・農家等それぞれ共通していたこととして、今まで行なってきた事業がSDGsに当てはまる。環境保全・地域活性化などSDGsに関連する市民・民間の取り組みは以前から活発で持続可能性に一致する取り組みがされていたのである。

実際各訪問先からは「やっと時代が追いついた」「言われてみるとSDGsに一致したことを行なっていた」と異口同音に聞かれた。

加えて、各団体はより多くの人に活動を知ってもらおうとしていた。

例えば、母力向上委員会は育児に取り組む夫婦のためのベビーステーション（おむつや粉ミルクといった育児用商品の特設コーナー）を富士宮市内のコンビニだけではなく全国に広めたいと語り、医療的ケア児用車いす『ストレッチャー型車いす』を開発したマクルウもその存在を知ってもらおうと各種メディアでPRしている。このように地域はもちろん、より多くの人に活動や製品を知ってもらおうとする印象を受けた。

働きやすさへの配慮をする企業も見られた（目標3、8に該当）。富士宮清掃とアサギリは働きやすい環境を築くために上司と社員の対等な関係性を重視しており、働きやすい環境を築くことは育児のしやすい環境の創出にもつながるだろう。

地域振興も富士宮市内でも活発である。やきそば学会は「若者が戻ってきたくなる街の重要性」を主張し、誰一人取り残さないというSDGsの目標をもとに「限界集落や定年退職者などが協力して地域に貢献することが必要だ」とビオトープ大岩の代表は語る。ホールアースは、「地域振興のための観光は大量消費ではなく、森林などの自然を侵さない理想的な観光モデル」を提案している。観光＝消費というニーズに合わせるのではなく、エコツーリズムのような自然環境の保全や地域振興を理念とする。このような観光に対して無関心層にも共感が得られるよう取り組んでいる。そのような観光モデルが成立する背景として、富士宮清掃は地域になくってはならない存在になるよう日々清掃活動や町の美化に取り組んでいる。これらはお互い意識しているわけではないが、各活動が矛盾無く相互を補完し、目標17に当てはまるであろう。

今回訪問した組織ではすでに取り組んできた事業が既にSDGsに適合的であり、調査対象となった組織には、数値目標達成にありがちな「目標を達成しなくてはならない」という「焦り」はなかったのは興味深い発見であった。

以上の主張の論拠として以下の2点が挙げられる。

4. 論拠①：自ら持続可能な社会のポリシーを立てる

図3 富士宮やきそば学会



まず各組織のポリシーについて見ていく。ここではSDGs目標の7、8、9、11、12番が関連項目としてあげられる。エンビプロは「自社の成長が社会の成長・サステナビリティ」と捉え、「廃棄物を資源に変える技術やエネルギーをシェアすることで持続可能性を維持する」としている。ホールアースでは「自然から学ぶ『価値』の提案」「自然と向き合っただ対応する知識」を重視し、アサギリでは「環境負荷を減らし、景観に配慮した施設づくり」を行っている。やきそば学会は「イベントを定期的に行うことで話題性を継続させる。そして地元の食材や産業の活性化につなげる」と語り、たけのこ園は「一匹狼から一歩先の農家へ」と語る。富士宮清掃では「この町をどういう町にしたいのか」ビジョンを掲げている。ゆのさや農園やタケノコ園では有機農法を行う理由として「自分で作った安心安全な農作物を届けたい」と話す。

次に地元に対する愛情である。ここではSDGs目標11番が関連項目である。エンビプロは「富士宮は地元愛が強い人が多い」と語り、やきそば学会は「『町の活性化』が第一」と語る。また「池の鴨たちがモチベーション」とするビオトープ大岩の声も聞かれた。

最後に事業のきっかけである。ここではSDGs目標の11、15番が関連項目としてあげられる。マクルウは「地域が一体となって環境保全に取り組むきっかけや、モチベーションを維持するためにどうすればよいのか」という視点から始まったと話し、やきそば学会は「興味をもってもらおう『とっかかり』を増やすこと」だと話す。ビオトープ大岩は「有志が中心となることでモチベーションを保つ。祭りが興味を持つきっかけとなれば」と話していた。またアサギリはSDGsの社内教育として、自分から考えることを奨励している。

5. 論拠②：循環を考慮に入れる

続いては、循環型社会への考慮である。特にここではSDGs目標の2、12番に関連して、食や健康に関する取り組みが各組織から把握できた。以下はその例である。

まず、やきそば学会は、健康・福祉・教育など生活のあらゆる面が「食」に関係しており、地産地消を継続していくことに価値があるとしている。また、富士パックはサーキュレーション・エコノミー（100%リサイクル）を提唱したり、エンビプロは一見するとゴミにしか思えないようなものもすべて「資源」ととらえ事業を進めるなど、有限である「資源」をどう循環させていくかに重きを置いている企業も見られた。ただ、エコロジックからは、「SDGsと

図2 マクルウ（右：安倍信貴常務）



絡めて取り組むにしても、あくまでビジネスであるため金銭的な利益がないと活動自体の持続が難しい」という、現実的な声も聞こえた。

人材育成の点では、富士宮清掃は実際に新規採用の市役所職員を対象に「清掃会社」の現状を理解させるために職業体験を行っている。これは結果的に環境への意識の向上が見られたようだった。またホールアースは、身に染みる体験的な理解を経て、その先に何ができるのかを共有することが重要であるとしている。ビオトープでは、地域密着型の団体ならではの祭りを催して人を呼び、楽しませながら環境保護の啓発・教育を行い、次世代に「循環」させる仕組みの基盤を作っていた。

以上、それぞれの企業へのヒアリングを通して、自分たちが行っている活動が17個のSDGs目標のうちの何番に当てはまるかというように「点」で見るのではなく、これらの全てがつながった「線」として捉え、活動を行っている企業や団体が多い印象を受けた。どの項目が当てはまったからそれでよしとする考えではなく、相互に各要素が関連したものである、という視点を我々は学ぶことができた。

図4 ゆのさや農園（右：片山康嗣代表）



6. 現状の問題とこれからの課題

一方で、各企業、各団体がそれぞれに問題を抱えていることも分かった。

論拠②でも取り上げたが、環境保護を始めとする「持続可能な社会」は一朝一夕で実現するものではない。何十年、何百年という長いスパンで見る必要がある。ここで挙がってくるのが「後継者」の問題だ。例として、ビオトープ大岩は「若手といってもその若手が50代、60代でその下の世代がいない。」と述べた。風岡たけのこ園は「跡継ぎがおらず、ものづくりより人づくりが急務である。高齢者だからこそ活躍できるのに、それをしないことの憤りを感じる。」と述べた。次の世代に受け継ぐ必要性を感じた。

また、地元住民ふくめ、無関心層にどう知ってもらおうかが課題と認識しているホールアースは「修学旅行生向けのプランを提案し体験させるという事業を展開し、最初は嫌がっていた生徒も一連の体験により、環境問題に取り組むよう変化がもたらされている。」と述べた。

加えて、外部からの視点の重要性を訴えた企業も見受けられた。アサギリは「良い会社とは何か」、富士パックは「本当に自分たちの住む富士宮市にSDGは普及しているのか。」と、現状に満足せず常に問い続ける問題意識を持っていた。他方で、一躍富士宮を有名にしたやきそば学会は「第三者や外部の人間のほうが、その地域の特性や良さに気が付きやすい。」と述べ、地元ではないメディアを利用する姿勢の重要性を認識していた。しかし、たけのこ園からは「テレビで放送されない『裏側の物語』つまり山の環境保全や高齢者問題などを知ってもらいたい。」という声も上がった。環境破壊に関する切実な事情も認識しなくてはいけないだろう。

SDGsは長期的な視点で取り組むことが重要だと考えていることが印象的だった。例えば、エンビプロは「資源が有限であるという認識が世間に広まっていく中、リサイクル業を営む自社はすべての業務がSDGsに当てはまり、解決しなければならない課題であるが、同時にチャンスでもある。」と述べていた。

マクルウは必要部分を抜き打ちした残りである廃材の金属フラットバーをツリーにしている。つまり廃棄物問題に対し「分解性が高いので、プラスチックの代替素材としてのマグネシウム活用を考えている。しかも、純度の高い粒状のマグネシウムは洗浄や肥料、他にも非常用電池などいろんな使用方法がある。」とのことであった。他方、富士宮清掃は「Reuse, Recycleは企業として取り組める。しかしReduceはできているだろうか？」と今後の課題について自問していた。このように循環型社会を実践する企業が富士宮市内で活躍している現状を私たちは高く評価した。

また、母力からは「産婦人科が少ない。」などの市への直接的な要望や、富士パックからは環境保護を謳う一方でコスト削減を優先しプラスチック使用を要求するSDGs先進都市を標榜する県内某市に対しての指摘もなされた。真剣にSDGsを考えて経営していることがよく分か

図5 風岡たけのこ園 風岡直宏代表



図6 富士宮清掃



った。

各組織から将来を見据えた目標が多く挙げられたが、そのどれもが未来に向けて、子どもから高齢者までの、あらゆる人と社会のつながりや循環を意識したもののように感じた。例えば、富士宮清掃は自社の存在意義と SDGs などの社会貢献を結びつけ、さらに地域社会を活性化させていくことに尽力すると述べ、アサギリは農業生産性向上に意欲を示した。また、エコロジックは「モデルをつくって大量消費ではない『本当の観光』を知ってもらい、森林などの自然を侵さないビジネスを創っていく。」という目標を掲げている。その他にも、以下のような様々な目標が語られた。

- ・ホールアース「ニーズの細分化に合わせ、共感していない人に向けての発信。」
- ・ピオトープ大岩「無関心層、若者から高齢者まで、さまざまな人々が協力して『やりがい』のある地域貢献のできる、誰一人取り残さない社会づくりを目指す。」
- ・マクルウ「医療的ケア児用車いす『ストレッチャー型車いす』をぜひ地元から広めたい」
- ・やきそば学会「若者が戻ってきたくなる街をつくりたい。」
- ・母力「ベビーステーションがあることがあたりまえになってくれればいい、男女関係なく、『地域みんなで』子育てできる環境めざしたい。」
- ・アサギリ「ありそうでなかったものをつくり、大変なことを大変なままにしない。」

図7 ピオトープ大岩（左）、ホールアース自然学校（右）



7. 成果：地域への提言（B：一部修正）

SDGs という概念は、国連組織や行政が主体となってなんらかの政策目標を立て、それに向けて民間活動を導く官主導のアプローチとは真逆である。むしろ「誰一人取り残さない」という基本理念にあるように、民間事業者・市民の活動が積み重なってはじめて実現する民間主導のボトムアップのプロセスである。

富士宮市は市民を啓発して SDGs を実現しようという行政主導モデルを目指すべきではないと考えた。むしろ SDGs を「気が付けば」実現させてきたこれらの民間活動を市外に向けたアピールを行うとともに、SDGs に向けた活動を行いたい民間事業者・市民の相談/紹介窓口、またはネットワークのハブとして、民間事業者・市民へのつなぎ役や支援・環境整備に徹することが望ましいと考える。

加えて、SDGs を軸とした「経済クラスター（集積）」あるいは「ビジネス・エコシステム（産業生態系）」つまり直接的取引関係にない組織・人を含む連携した関係にも注目したい。さらに実証研究を進める必要はあるが、SDGs にむけた産官学民・多業種の協働/連携による「新結合」＝イノベーションも期待できる。

8. 富士宮市役所より所感

本市では人口減少や少子高齢化の課題に直面する中、持続可能なまちづくりや地域の活性化を実現するため、今後策定する「第5次富士宮市総合計画後期基本計画」と次期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の施策に、SDGs の視点を生かしていくこととした。

また、富士宮市における SDGs の取組を「富士山 SDGs」、今年度を本市の「SDGs 元年」として、市民への普及啓発や本市の課題解決に向けた具体的な取組を進めているところ、市民への浸透が課題と捉えていた。

そこで、「SDGs の推進と市民啓発の方策の研究」をテーマに、学生ならではの新しい視点やアイデアで SDGs を発信できないかと考え、ゼミ学生等地域貢献事業に応募した。

今回、静岡県立大学の調査研究を通して、本市の民間活動を「気が付けば実践している SDGs」と評価をしていただいた。もともと、富士山の麓で暮らしている富士宮市民は、地域の環境保全活動、持続可能な農業を進める有機農家や社会的価値創造に取り組む民間事業者や団体が多く、そこを PR していくという発想は私たちにはない新しい切り口だった。

また、市の役割として、この民間事業者で蓄積された活動をボトムアップして、連携させることで産業振興やイノベーションにつなげていくこと、SDGs を実践している多くの人や事業者がいるまちとしての「地域ブランディング」のイメージ戦略についてもご提案いただき、市が進める SDGs 推進事業に大変参考になった。